

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] vol.254

2-3

February&March 2023

特集

02

ソナタ、その遙かな可能性へ
—小菅優がいま辿りはじめる〈開花〉の眩しさ



- 02 小菅優「ソナタ・プロジェクト」Vol.1～開花～
- 06 オルガン・レクチャー・コンサートVol.6 梅干野安未(オルガン)インタビュー
- 08 バトリツィア・コバチンスカヤ ヴァイオリン・リサイタル
- 10 ちょっとお昼にクラシック LEO(箏)インタビュー
- 12 INFORMATION

©Takehiro Goto

水戸芸術館
ART TOWER MITO

ソナタ、その遙かな可能性へ

—小菅優がいま辿りはじめる〈開花〉の眩しさ

文：山野雄大（音楽評論家）



©Takehiro Goto

余韻の深みに広がる雄弁

不思議なことに……と言っているの分かりませんが、優れたピアニストの皆さんとお話すると、いつも「お話が面白いなあ」と感じつつ、その演奏を聴くと、お話よりも遙かに雄弁な、しかし決して言葉にならないその〈雄弁〉に圧倒されてしまいます。

当たり前だろう、と言われればそれまでですけど、ピアニストの〈雄弁〉は、その沈黙—余韻の中にまでも遙かに続いているのが、凄いことなのかも知れません。美しく磨き抜かれた詩歌の余白にこそ情感の余韻が微かに響いているように、鍵盤から指を離してピアノの響きが静かに遠のいてゆく……その消えてゆく音のしじまにも、静かに押し寄せつづける情感の深さに、幾度となく心を震わされ

てきました。

小菅優さんも、本当に豊かな時間を—余韻の深さにまでも素晴らしい雄弁を広げてくれるピアニストです。

お目にかかってあれこれお話していると、大きな瞳を細めたり見開いたり、柔らかな表情で音楽を語り続ける小菅さんの（ちょっと奔放な）語りは、訊き手を自然に惹きこんでくれます。なにしろ知情豊かなピアニストで、もともと大の読書好きで、映画を愛し、美術を愛し、良き音楽仲間たちと語らうことを愛し……日々の熱心な研究と鍛錬に、生きることの喜怒哀楽が自然に繋がっているような（もともと、喜怒哀楽の怒だけは見たことがないのですが、もちろんはっきりあるのだろうなあと勝手に想像しつつ）、人間も芸術も本当に魅力的な方です。

感性を豊かに耕しながら、さりとしてその貪欲な知識欲に溺れることはなく、広い視界にとらえたものをしっかりと我がものにしてゆき、ゆっくりと確かに変化し続ける……その変化の豊穡こそが、小菅優というピアニストの音楽をより深く、瑞々しく新しいものであり続けさせているのでしょう。

ごく若いデビューの頃から優れたピアニストでしたが、目覚ましい活躍を重ねるうちに、ほんとうに魅力的な音楽家として、ピアノの表現を磨き広げてきました。彼女が響かせる色彩の繊細さ、驚くほどに巨大な音宇宙をしっかりと捉えてみせるその表現、そして深く澄んだ詩情の底に広がる夢幻の〈雄弁〉……。小菅優さんの残す余韻は、コンサートを聴き終わって歩く帰り道でも、静かに美しく響き続けています。

ベートーヴェンのピアノ・ソナタ、 その極限へ

小菅さんのコンサート、そして着々と重ねられてきたレコーディングの数々を追いかけてきて、いくつもの幸せな記憶を思い出すことができるのですが、まず最初の大きな山嶺を見せてもらったのは、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会&全曲レコーディング(2010~16年)でした。

ベートーヴェンという作曲家は、その出発期から晩年に至るまで、ほぼ生涯を通してピアノ・ソナタを書き続けています。番号がついているソナタだけで全32曲、そこにはベートーヴェンの創造、その多彩な進展も深く刻まれながら、彼自身の苦悩と歓喜の渦巻く人生も響いている傑作揃い。

その大きな山脈を、20歳代だった小菅さんがコンサートとセッション録音とで、力強くも緻密な歩みで辿り抜いたのは、聴き手にとっても忘れ難い体験になりました。

東京の紀尾井ホール、大阪の住友生命いすみホールでそれぞれ連続演奏会《ベートーヴェン・ピアノ・ソナタ全曲演奏シリーズ》が展開され、その渾身のライブの成果をあらためて研ぎ磨くように、毎年夏にほかならぬ水戸芸術館で、セッション・レコーディングがおこなわれ……。まさにベートーヴェンの人生と格闘するような毎年のサイクルは、演奏会とディスクと、それぞれ《出発》から《極限》までタイトルとなるテーマでまとめながら、着実にかたちとしても残されてゆきました。

水戸芸術館の美しい響きそのものも楽器の一部としてつくられた、ベートーヴェンの連続録音は、感情と理性の昇華とを大きな伽藍へ築いてゆくような、彼女がベートーヴェンのピアノ・ソナタという巨大な〈生〉を生き

きた、素晴らしい旅路でした。

人生を刻むソナタ、 そうでないソナタ……

ベートーヴェンにとって〈ピアノ・ソナタ〉は、自らの表現、自らの生の葛藤を刻み続け、その〈貌〉と〈魂〉をみせているようでもある大切な曲種でした。彼の全32曲ほど、音楽家の旅路を象徴するにふさわしいものは、なかなか他に無いのかも知れません。

というのも、ピアノ曲の世界でもこれはかなり珍しい話で……たとえばモーツァルトのピアノ・ソナタ全集をつくるとなれば、ベートーヴェンのような〈生の葛藤〉とは無縁の、まったく異なる旅路を歩くことになるでしょう。

はたまた、同じピアノ・ソナタの世界に孤高の境地を拓いた天才シューベルト。ロマン派の時代になって新たな個性を確立したシューマンやブラームスのソナタ、さらにリスト、ショパン……と、〈ピアノ・ソナタ〉の名を冠していても、作曲家の創作における位置づけから重みから、その表現内容から形式から、まるきり異なるものです。

ピアニストが独り深く向き合うピアノ・ソナタの世界——漠然と使っているこの〈ソナタ〉という言葉ですが、考えてみると、よく耳にするわりに何を指しているのか、実ははっきり分からない気もします。

なんとなく、曲種をさすのだろう、くらいで別に構わないとは思いつつ、たとえば音楽辞典のたぐいを開いてみると、〈ソナタ〉の項だけで、時代ごとに異なる意味あいや実態の変遷から何から、延々と何ページも記述が続くのでたじろいでしまいます。

ごく簡単に「普通、ソナタ形式で書かれた楽章を含む3~4楽章からなる

器楽曲をソナタとよぶ」(『新訂標準音楽辞典』[音楽之友社]谷村晃執筆)というところを引いてみても、まあそうだけど……となってしまうのが〈定義〉というものの哀しさ。ソナタ形式で書かれた器楽曲——というと、独りで弾くピアノ・ソナタも、弦楽器奏者と二人で弾くヴァイオリン・ソナタも、はたまた弦楽四重奏も、チェロ協奏曲も、オーケストラのための交響曲も、ソナタ形式で書かれていれば、非常に広義の〈ソナタ〉の一種です。

それこそ「この意味でのソナタは18世紀なかば以降こんにちに至るまで西洋音楽のレパートリーの大きい部分を占めてきた」(同上)となるわけで、やっぱりはつきり分らない……と思ってしまうのも、これは仕方ない話ではあります。

〈鳴り響かせる〉のがソナタ、 そのキーワードは……

ソナタの語源は、イタリア語の〈ソナーレ(鳴り響かせる)〉から来ているそうで、これは〈カンターレ(歌う)〉に対する言葉でもあります。楽器を響かせる、ということと密接に繋がっているのがソナタ、というわけで、だいたい独奏曲とか室内楽の作品にソナタと冠されることが多いようです。

ところが、〈ソナタ〉とひとくちに言っても時代によってその実態はまちまち。ソナタと題した作品が現れ始めた頃(16世紀末から17世紀くらいでしょうか)には、声楽曲を器楽のためにアレンジした作品がソナタだったり、舞曲をまとめた作品がソナタだったり、とにかく〈新しいかたちで鳴り響く器楽曲〉ならソナタ、という大ざっぱな命名だったようです。

それが、時代を経て〈ソナタ〉ならでは構成が、だんだんまとまってき

ます。さまざまな〈対照的〉な楽章を組み合わされた〈多楽章の〉器楽曲がソナタ、という傾向がはっきりしてくるわけですね。

ここにキーワードがあります。

〈ソナタ〉に欠かせないのは〈対照〉です。2つのことを照らし比べて、お互いの違いもはっきりしてくること……その〈対照〉の面白さが、ソナタの楽しみをかたちづくる核になっているのです。

〈対照〉のエネルギーが、どんどん拡張されてゆき……

幾つかの楽章を集めた〈ソナタ〉、その楽章それぞれが、みんな似たような歩きかた・まったく同じような雰囲気だったら、それはおそらく非常に面白くないソナタになってしまうでしょう。そこには〈対照〉が必要です。

多くのソナタでは、緩急のつけかたに、好まれる〈対照〉のパターンがあります。

たとえば、第1楽章がテンポも速め(=急)、第2楽章はゆっくり聴かせる緩徐楽章(=緩)、第3楽章は舞曲風(メヌエット、あるいはスケルツォ)で、第4楽章はまたテンポも速いフィナーレ(=急)……と、〈急・緩・(舞)・急〉とも言いましょうか。

あるいは、〈急・緩・急〉と3楽章構成のソナタ、もたくさんあります。時代を遡ると緩急の順番が違って〈緩・急・緩・急〉のソナタが一般的だった頃もありました。

いずれにしても、さまざまな対照的な楽章が合わされている、その起伏の豊かさはソナタに欠かせないもの。—緊張と弛緩、その流れが力を生む……というわけですが、人間の心が動くのも、やはりこうした起伏あつてのことでしょう。

さらに、〈ソナタ〉は、いくつもの楽

章があればこれ対照される、というだけではありません。ソナタを形づくる装置のひとつ—ソナタ形式そのものが、〈対照〉の原理でどんどん広がり続けてゆく……という性格のもの、でもあります。

ソナタ形式ですと、第1主題(最初に聴こえるテーマ)が奏されてしばらくすると、異なるイメージを感じさせる第2主題(副次主題)が出てきて、この〈対照〉がまず良き緊張関係をつくりまわります。……この〈呈示部〉に続いて、主題の要素をあれこれ変化させてゆく〈展開部〉が新たな起伏をつくり、さらに主題たちが復帰してくる〈再現部〉へ……と、大きく3つの部分で構成されたものがあります。

この〈呈示部〉〈展開部〉〈再現部〉という起伏から生まれる、心地良い緊張関係—あれこれ工夫をこらされた〈対照〉の多彩さが、ソナタ形式の面白さを支えているのです。

こうした構成法は、ほかにもたくさんあるパターンがあつて、それこそ無数の可能性があります。なにしろ、テーマの展開にしても、はたまたハーモニー(和声)の変化でつくられる起伏にしても、小さくまとめることもできれば、どんどん付け足して長くしてゆくこともできるからです。

ソナタ形式のことを「本質的に飽くことを知らぬ拡張する形式」と言った人もいます(アウグスト・ハルム／西川紘子・堀朋平訳『フーガとソナタ音楽の2つの文化について』[音楽之友社、2017年])。正にその「飽くことを知らぬ」貪欲な拡張性、自由な可能性こそが、多くの作曲家の創作意欲を大いに刺激しましたし、それがまた〈急・緩・急〉といった大きな起伏の箱に収められて〈ソナタ〉という曲種になる……その収まりの良さも、非常に腕のふるい甲斐のあるものだった

のです。

《Four Elements》から新たな《ソナタ・プロジェクト》へ

〈ソナタ〉の可能性をパワフルに追究していった、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ群。その遙かな山脈を既に走破した小菅優さんですが、続く大プロジェクトとして(これも忘れ難く素晴らしい成果を挙げた)、4つの元素〈水・火・風・大地〉をテーマにした新リサイタル・シリーズ《Four Elements (フォー・エレメンツ)》を2017年から4年にわたって開催し、レコーディングも生まれました。

例えば〈水〉の回では、生に駆け込んでいく〈水〉、そのさまざまな姿にインスピレーションを受けて生まれたピアノ曲の数々(たとえばフォーレの舟歌、ラヴェル〈水の戯れ〉、リスト《エステ荘の噴水》や武満徹《雨の木素描》、現代作曲家・藤倉大の《ウェーブス》……)を集めるなど、ピアノ音楽の多種多彩を小菅さんならではの広い視野で捉えた、素晴らしいシリーズでした。

この知性と感性の昇華された見事な《Four Elements》シリーズに続いて、小菅さんが〈ソナタ〉の宇宙に帰ってくる……ときけば、ベートーヴェンのツィクルスを歩き抜いた頃のピアニストからまた豊かな変化を遂げた、その鋭くも深いまなざしで見えるもの、を聴き手も全身で共有できることが、ただただ楽しみになります。

小菅さんは今回、さまざまな時代の作曲家たちが〈ソナタ〉に繰り広げた挑戦と冒険、遙かな探究……その広大な魅力をたどる旅へ出ます。その初回は、題して〈開花〉。のちに巨匠となる作曲家たち、その原点に焦点をあてたプログラムです。

多感な開花のとき、 にしか生み得ないエネルギー

まず、J.S.バッハのソナタ 二長調 BWV963は、まだ作曲家が18歳だった1703年から07年頃のあいだに書かれたらしい、まさに開花期の作品。まだ何者でもない、しかし血気盛んな青年が書いたソナタは、既にして力のこもったフーガに〈めんどりの鳴き声を真似た主題〉も織りまぜて素敵な愉しさを醸し出す、魅力的な曲です。

続くベートーヴェンの〈選帝侯ソナタ〉WoO.47から第2番へ短調は、いわゆる番号付きの有名な全32曲のソナタを書く前、まだ学習期にあたる1782年(12歳!)に書かれた習作……とされているのですが、へ短調という調性で書かれたこの第2番、のちの傑作《悲愴》《熱情》ソナタにも遠く連なってゆくような冒険も組み込まれた、おそろべき〈開花〉。

時代かわって、ロシアの鬼オプロコフィエフが書いたピアノ・ソナタ第1番へ短調 作品1は、彼が(天才すぎるあまりに)音楽院の教授たちを手こずらせていた学生時代の〈開花〉。自身も優れたピアニストであった、その技量と表現意欲が短いなかにも炸裂する逸品です。

そして、若き日に3つのピアノ・ソナタを書いたブラームス、その葛藤の集成ともいべきピアノ・ソナタ第3番へ短調 作品5。ピアノ・ソナタという曲種が暗中模索していた時代にあって、まだ道を探していた頃の青年ブラームスが、実に緊密な構成力をもってエネルギーを爆発させた傑作です。彼はその後、バラードやラプソディ、変奏曲などピアノ曲の傑作は数々書くものの、ピアノ・ソナタは二度と書くことはなかった……という事実



©Takehiro Goto

も、〈ソナタ〉の可能性と真摯に向き合ったブラームスの葛藤と昇華を重く響かせるでしょう。

—と、出発期の作曲家にしか書き得ない、瑞々しくほとばしる力も輝く作品が並びます。これら4作にはそれぞれ、〈ソナタ〉の可能性を拡張する、眩しいほどの意欲が溢れています。〈対照〉の愉しさ、〈対照〉が掘り込む烈しさ、美しさ、その多彩……。旅を重ねてきたピアニストが、いまひとつ、多感な開花の眩しさと向き合う。時代を超えたまなざしと情熱の交差が、どんな新しい世界をみせてくれるのでしょうか。

〈ソナタ〉とひとくちに言っても、そこには途方もなく多彩な、奥深い世界が広がっています。それは、ピアノ曲の歴史そのものと重なるほどの巨大な可

能性でもあり、限らない〈雄弁〉が繰り返される無限の宇宙でもあります。小菅優さんの新しい旅のはじまり、ホールの座席に身を沈めて全身で体感する時間……想像するだけで昂るではありませんか。

■公演情報

小菅優 「ソナタ・プロジェクト」Vol.1 ～開花～

2023.2.26(日) 15:00
全席指定 一般¥4,000円、
U-25(25歳以下) ¥1,500

●プログラム

J.S.バッハ:ソナタ 二長調 BWV963
ベートーヴェン:〈選帝侯ソナタ〉WoO.47より
第2番へ短調
プロコフィエフ:ピアノ・ソナタ 第1番
へ短調 作品1
ブラームス:ピアノ・ソナタ 第3番へ短調 作品5

世界に冠たる“オルガン都市”パリの伝統と文化の奥深さ

梅干野安未(オルガン)インタビュー

聞き手・鴻巣俊博



—梅干野さんのオルガンとの出会いはどのようなものだったのですか？

もともと小さい頃からピアノを習っていたのですが、中学生の時に少し距離を置いた時期がありました。中学校はキリスト教系の学校だったので毎日礼拝でオルガンを聴いていて、ある日、人から「ピアノが弾けるならオルガンも弾いてみたら?」と言われたのです。その時には全然ピンと来なかったんですが、試しにオルガンを弾いてみたら、1人でオーケストラのような多彩な音色が出せることに感動し、オルガンならではの楽器的な魅力を強く感じました。そこからはオルガンの道、一直線! 良い先生に巡り会うことができ、東京藝術大学オルガン科に入学しました。今思うと、オルガニストとしてとても良いスタートを切ることができたと思います。

—その後、修士課程を終えて名門・パリ国立高等音楽院(以下、パリ音楽院)に留学をされました。なぜこの学校を選ばれたのでしょうか。

東京藝大の学部3年生の時にパリ

に住んでいた先輩の家に遊びに行き、一緒にスペインのサン・セバスチャンにオルガンを見に行ったことがありました。海が近くて、美食の街としても有名なところなのですが、その街のサンタ・マリア・デル・コロ大聖堂というところにカヴァイエ=コルが製作したオルガンがあります。カヴァイエ=コルはフランス人ですが、スペインや他の国にも多くの楽器を残した製作家でした。私たちはそこでオルガン講習会に参加したのですが、その時の講師がミシェル・ブヴァール先生だったんです。おそらく先生は覚えていらっしゃらないでしょうけど「フランスに来てみたら?」と言ってくれたことを私は頑なに覚えていて、「私はフランスに行くんだ!」という気持ちがこの時に芽生えたわけです。藝大ではドイツものがご専門の今井奈緒子先生に主に教わっていたのでドイツ作品もたくさん勉強させていただき、フランスのオルガンと出会ってからは早島万紀子先生や廣野嗣雄先生からもいろいろな要素を学べたことは自分の強みになったと思います。

ブヴァール先生とオリヴィエ・ラトリー先生の2人が教授を務めるという

体制になってから、パリ音楽院のオルガン科に入学した日本人はいなかったので、入試や授業がどんなものなのか誰にも聞くことができませんでした。「のだめカンタービレ」の漫画の中で描かれていたパリ音楽院のソルフェージュ試験の描写を参考にするほど情報がなかったのですが、いざ受験してみると漫画の通りで驚きました(笑)。

日本ではオルガニストという職業はマイナーな存在だと思いますが、世界最高峰の音楽高等教育機関であるパリ音楽院では至る所にオルガニストがいる、という新鮮な状況に驚きました。オルガン科はもちろん、作曲系の先生にもオルガニストが多く、特にエクリチュール(作曲書法)はフーガ、対位法、和声などの先生がみんなオルガニスト、学部長もオルガニストで「オルガニストってこんなにいるの?」と思うぐらい。そしてその先生方はフランスの名だたる教会のオルガニストを務めている方ばかりで、彼らが学内で一堂に会するところを目の当たりにして凄いと、来てしまったな、と実感しました。

「オルガニスト=作曲や即興は当然」という伝統が根強く、オルガニストになるまでにあらゆる知識を持ってなくてはいけない、という暗黙の了解のようなものがありました。「ムジシャン・コンプレ」(完全な音楽家)の代表格のオリヴィエ・メシアン(1908-1992)は11歳でパリ音楽院に入学して11年間の在学中にいくつもの単位を優秀な成績で取得(これをプルミエ・ブリという)しましたし、そのようにあらゆる知識と技術を持つ「ムジシャン・コンプレ」と呼ばれる人たちの存在が本当に身近に感じられる環境は衝撃的で、すごく刺激的な毎日でした。

—まさにフランスの音楽史を作ってきた人々、そしてこれから作っていく人々が交差する場所なのですね。そんなパリ音楽院での授業やレッスンというのは、いったいどのようなものだったのでしょうか。

オルガンの実技は週に1回、1時間ほどのレッスンがあり、ブヴァール先生とラトリー先生が1年ごと、もしくは半年ごとなどの期間で交代して実技を教えてくださいました。その他2時間ほど「クラス・コミュニケーション」という時間がありました。オルガン科の学生がみんな集まる場で誰かが演奏を発表して、批評しあうという時間です。2人の先生はそれぞれ違うビジョンを持っていて、ある演奏に対してラトリー先生は「遅い」と言うし、ブヴァール先生は「速い」と言う(笑)。そんなことが毎回繰り返されていて「結局どうなのよ」と思うのですが、説得力のある演奏をする大切さを知った興味深い時間でした。

オルガンだけでなく、ソルフェージュやアナリーゼ(分析)、通奏低音の授業もありましたし、即興やエクリチュール(作曲書法)も必修です。修士1年次にエクリチュール本科にも併科登録してからは、週10時間ほど和声の授業があって壮絶を極めました。充実していたことは間違いありません。

ノートルダム大聖堂オルガニストのフィリップ・ルフェーブル先生は大聖堂で即興のレッスンをしてくれることもあり。ミサも頻繁に聴きに行きましたし、毎週のようにノートルダムに通っていた時期がありましたね。修了演奏会もノートルダムだったのですが、その前に音を組むリハーサルがあるんです。夜11時頃に行って、朝の7時まで音を作っているうちに大聖堂内で夜明けを迎えます。オルガンは高いところにあるので、夜中に下を見る

と真っ暗。暗闇と音との対話の時間でした。2019年の火災以後、あのオルガンの音は鳴っていないので、それを考えるとまさに夢のような時間でしたね。

あとはヴェルサイユ宮殿の礼拝堂でコンサートの機会もいただきました。宮殿がお休みの日、観光客も誰もいないところで練習をさせてもらうので、鏡の間に私ひとり、という常識では考えられない環境での練習! その他数えきれないほどの貴重な経験をたくさんさせてもらいました。

—今回のレクチャーコンサートは「パリの街と教会、パリ国立音楽院の変遷をめぐる」というサブタイトルがつけられています。梅干野さんのパリでの経験に裏付けられたお話が聞くことができるのが楽しみです。

フランクがサント・クロチルド教会のオルガニストをしていたのと同時に、ヴァイドルがサン・シュルピス教会のオルガニストで、サント・トリニテ教会にはギルマンがいて、弟子たちは彼らの演奏をばしごして聴くことができたというゴージャスな時代がありました。それが今でもノートルダムではラトリー、サン・シュルピスではダニエル・ロートの演奏が聴ける環境がずっと続いているというのが、パリの凄いところ。昔から変わらない教会や街並みがある一方、今のパリ音楽院のようにモダンな建物があり、その隣にはもっと宇宙的なデザインのコンサートホールができて、その中には現代の理想を追求したオルガンがあり…という文化的な幅の広さ、伝統の深さがパリの街そのものだと感じます。このレクチャーコンサートではそのような要素を感じていただけると嬉しいです。



即興の先生でノートルダム大聖堂のオルガニスト、フィリップ・ルフェーブル氏と共に

—曲目も多彩で、とても充実したレクチャーコンサートになりそうですね!

前半は交響的なオルガンの響きを求めて作られた作品をピックアップしました。フランク以降、ヴァイドルやヴィエルヌらの作品でありにも音が重厚になった反動から、古典に回帰するようなネオ・クラシックの時代が訪れました。後半で紹介するこれらの作品では様々な音色を使用され、フランスならではの色彩感がより豊かになっていきます。作品を通して、音色がカラフルになってゆく過程をお伝えできるよう努めますので楽しみにしてください!

2022年11月27日

zoomにて

※インタビュー全文は当館ウェブサイトに掲載いたします。

■公演情報

オルガン・レクチャーコンサートVol.6
フランス・オルガン
交響楽派から現代へ
〜パリの街と教会、パリ国立音楽院の
変遷をめぐる〜

2023.2.23(木・祝) 19:00
全席指定 A席¥3,000、B席¥2,500、
U-25(25歳以下)¥1,000

講師・演奏:梅干野安未
コーディネーター:室住素子

●曲目

フランク:(3つの作品)より(英雄的作品)
デュリュフレ:アランの名による前奏曲とフーガ
作品7
メシアン:(栄光の御体)より第6曲(栄光の御体
の喜びと明るさ) ほか

コパチンスカヤに振り落とされなかったために

文:伊東信宏(大阪大学教授・中之島芸術センター長/音楽学)



初めてパトリツィア・コパチンスカヤ(以下、PK)と会ったのは、2004年のことだった。バーゼルのパウル・ザッハー財団で資料調査をしていた時に、旧知の怪人ピアニスト、大井浩明氏に一度聴いてみると言われて、ベルンまで出かけていったのだった。大井氏はベルン音大の学生時代、PKと出会い、議論したり合奏したりしてきた間柄である。その時のベルンの演奏会で彼女が弾いたのは、メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲だったか。彼女は(その後日本の聴衆もお馴染みになるように)裸足で出てきて、すでに極めて挑発的な演奏をしていた。表現のためならどこまでも突っ走る大胆さ、その荒々しさと繊細さは、自分がヴァイオリンというものに、あるいはそもそも演奏というものにそれと意識せずにも求めていたものをそのまま耳にしているように思えた。以後、筆者は彼女の絶対的な信奉者であり続けている。

その後しばらくして、彼女は初来日する。演奏会の合間に、彼女を京都に連れて行き、超高級割烹のHなどにも同行した。めったに出入りできるような店ではないが、筆者の幼馴染みがスポンサーとなってくれたと記憶する。その後も、ヨーロッパや日本の色々なところで彼女の演奏を聴き、またリハールを見学し、いろんな話をしてきた。

その中で特に印象深いのは、2015年のチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲の録音である。彼女はそこでテオドール・クルレンツィスと彼が率いるムジカエテルナと一緒に演奏していた。筆者は、この録音のサンプル盤を手に入れた時、ちょうど或る音楽雑誌で連載を始める直前で、その1回目の原稿を書いたばかりだった。そして一聴して、彼女の熱烈な信奉者を自認していたけれどまだまだその認識が甘かった、と痛感し、1回目の原稿をボツにして彼らのことを論じ直すことに

した。オーケストラの演奏の方にも心の底から驚かされ、じっとしていられなくなって、ケルンまで弾丸ツアーで聴きに行った(2016年1月)。その時は、PKはベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲でクルレンツィスと共演していた。

この熱狂ぶりは2019年春、クルレンツィスがPKと共に来日した頃まで続く。私は結局、ムジカ・エテルナを追いかけて、ベルン(当時彼らが本拠としていたウラル山脈の麓の都市)まで行き、そして連載の原稿は結局、PKとクルレンツィスたちを主人公として本にもなった(拙著『東欧音楽綺譚』)*1。

私なりにPKに寄与できたと思う出来事もあった。2017年にリリースされたDeuxというアルバム(PKはピアニストのポリーナ・レシェンコと共演している)。ここで二人はラヴェルの〈ツィガヌ〉をとんでもなく大胆なやり方で弾いているのだが、レコーディングの段階で「貴方はこの曲について

何か面白いことを言っていたように思うけれど、どういう話だった？」とPKからメールが来た。筆者は〈ツィガーヌ〉について、バルトークとイエリー・ダラーニ(〈ツィガーヌ〉を捧げられた女性ヴァイオリニスト)とラヴェルの微妙な相互関係について日本語で書いていたことがあったので、そのかなり長い顛末を無理やり英語に直してPKに送った。すると彼女から、これは面白いから今度のCDの解説に紹介したいと返事が来た。結局、CDにはこの話を骨子とした解説が載っていて、最後に筆者への謝辞が添えられている。得難い経験だった。

そしていつの頃からか、PKは筆者と一緒に彼女の生まれ故郷のモルドヴァを旅行してみたい、と言うようになった。そもそも大井氏が筆者を彼女に紹介した時に、伊東は東欧に詳しい民俗音楽学者だ、と言ってくれたらしく、PKはそれならモルドヴァに行くべきだ、と最初から思っていたようだ。PKの父親ヴィクトール・コパチンスキ氏は、モルドヴァがソ連の一部だった頃の高名なツィンバロム奏者で、母親は彼の民俗楽団のヴァイオリン奏者だったので、PKにとって「東欧民俗音楽」というのは最も身近なものだったのだ。実際、彼女はこの父や母と一緒にRapsodiaというアルバムを作っている(2010年)。そこには両親とPKと一緒に演奏するモルドヴァの民俗音楽のレパートリーが入っているし、またラヴェルの〈ツィガーヌ〉はここではPKのヴァイオリンと、父親のツィンバロム(!)で演奏されている*2。彼女がモルドヴァ旅行のことを口にし始めたのはこのアルバムが形になった頃からだっただかと思う。

それがついに実現したのは2019年の秋。私としてはもちろんPKとモルドヴァを旅するなんて断る理由がない

から万難を排してモルドヴァまで行ったのだが、行ってみて驚いたことに、それはPKにとって極めて個人的な家族旅行みたいなものであり(同行者は彼女と娘、そしてPKの両親と姉)、しかもPK自身、モルドヴァから亡命して以来二度目の里帰りだった。自分がなぜこんなにプライベートで大切な旅行に同行しているのか、自分でもよくわからないままに、ともかくPKが生まれた街(モルドヴァの首都キシネウ)を歩き、彼女の父が生まれた村に行き、父が組織した民俗楽団(の末裔)が演奏してくれるのを彼女たちと一緒に聴き、そして雄大な景観の中にある中世そのままの修道院などを見て回った。

彼女のルーツがモルドヴァの土にある、ということはわかっているつもりだったけれど、やはり実際にその土の匂いを嗅ぎ、その空気の中で普段よりもっといきいきしているPKを見たことで、彼女の演奏は私にとって一層切実なものとなった。

そしてPKはさらに大胆な表現者へと脱皮してゆく。腕を痛めてヴァイオリンの演奏をセーブせざるを得なくなった時期に、彼女はシェーンベルクの〈ピエロ・リュネール〉の朗唱パートに挑戦するようになって、これは2021年にCDとしてリリースされた。本職の歌手にとっても手強い作品だが、彼女は誰より大胆に、しかも誰より精密にこの音楽を形にしている。この〈ピエロ〉で出会ったピアニストが、今回のリサイタルで共演するヨナス・アホネンで、その強靱でクリスタルなピアノは、PKの近年の演奏に一段と凄みを加えることになった。そもそもアホネンは、フィンランド出身だが、現代音楽を専門とするクラングフォルム・ヴィーンのピアニストで、シェーンベルクが音楽的母語とでも言

えるような音楽家である。そして同時に歴史的鍵盤楽器の演奏にも挑戦している。PKはこれまで様々な大胆なピアニストと共演してきたが、方向性が似ていて互いに挑発しあう、という意味ではアホネンとの組み合わせは最も刺激的で、聴き逃さない。

今回のコロナ禍で自宅に閉じ込めらざるを得なくなった時に、PKは作曲も始めたらしい。父ヴィクトール・コパチンスキ氏も個性的で半ば即興的な作曲を行う人なので、これは不思議なことではないのかもしれないし、あるいはアンコールなどでその一端を聴けるかもしれない。

どんどん加速してゆく彼女の変貌ぶりについてゆくのは、聴き手である私たちにとっても生易しいことではない。振り落とされないように、こちらも覚悟を決めなければ。今や21世紀を代表する表現者となりつつあるPKについて、最近本当にそう思う。

※1 ちなみにウクライナの戦争が始まって以来、クルレンツィスはプーチンと関わり深い銀行から支援を受けていた(にも関わらず、ロシアの戦争を否定しなかった)ということで西側のメディア、あるいはヨーロッパの音楽界から糾弾されることになった。筆者は、その成り行きを息を潜めて見守っている。

※2 元々〈ツィガーヌ〉は、ヴァイオリンと「リュテアル」のために書かれていて、この「リュテアル」というのはピアノに取り付ける音色変換装置で、これによってツィンバロム風の音が出せる、というものだったので、ツィンバロムで演奏する、という彼らの試みは全く正当なものである。

■公演情報

パトリツィア・コパチンスカ ヴァイオリン・リサイタル

2023.3.21(火・祝) 15:00

全席指定 一般¥6,000、

U-25(25歳以下)¥2,000

ピアノ:ヨナス・アホネン

●曲目

シェーンベルク:幻想曲 作品47

ベートーヴェン:ヴァイオリン・ソナタ 第7番
ハ短調 作品30の2

ウェーベルン:4つの小品 作品7

ベートーヴェン:ヴァイオリン・ソナタ 第9番

イ長調 作品47(クロイツェル)

箏で弾くクラシック—箏の始原から生まれる新たな表現

LEO(箏)インタビュー

聞き手: 篠田大基



—LEOさんは、小学生のころにインターナショナルスクールで箏に出会ったとお聞きしましたが、どんな授業だったのでしょうか？

僕が通っていた学校は幼稚園から高校までの一貫校で、その小学校4年生の音楽の授業からずっと、中学でも高校でも、授業選択で音楽を選んで、そのなかで箏を選び続ければ、ずっと箏に触れながら音楽の授業を受けられたんです。カーティス・パターソン先生というアメリカ人の先生が、その箏を使った音楽の授業をさせていました。

4、5年生のときは、年に1回ある発表会で1曲、みんなで弾くことに焦点を当てて、みんな英語を使っているから、漢数字が縦書きで並んだ楽譜を読むのに苦労するんですけど、1年かけて練習して覚えるという感じでした。中学生(6~8年生)になると、箏の調絃をドレミに並べて、それで音階

を理解したり、たとえば調絃をブルース・スケールに並べて、先生がブルースのコード進行を弾いている上で、みんなで即興したりして、音楽理論の初歩も箏を使って学べたんです。本当に面白いカリキュラムで、素晴らしい先生でした。あの授業があったことで、箏に対する固定観念みたいなものがなくなったし、音楽に対して自由な視点を持ってたきっかけは、そこにあったのかもしれないですね。

—カーティス・パターソン先生は水戸芸術館にもいらしたことがあったんです。「箏衛門」(沢井箏曲院門下の箏奏者による合奏団)のメンバーとして、2002年にコンサートとワークショップでいらしてくださいました。

そうなんです！なんだか親近感がわきますね。僕はまだ水戸に行ったことはないんですけど、じつは最近、父方の祖父母が水戸に引っ越したん

です。そんなこともありまして、水戸に行くのがさらに楽しみになりました！

—今回の曲目について教えていただけますか？

1曲目は、僕が所属している沢井箏曲院をつくった沢井忠夫先生(1937~1997)の〈鳥のように〉。1985年の曲ですけど、僕の印象では、箏のスタンダードというか、もう古典の域だと思っています。それでその次に正真正銘の古典、江戸時代に作られた〈千鳥の曲〉をつなげました。まずはこういう曲で、「お箏ならではの」「お箏らしい」という音を聴いていただければと思っています。

3曲目のドビュッシーの〈ヴェール(帆)〉からは、同じ箏でも、ここ数年での革新や僕が模索している新しい箏の音楽みたいなのところにつながれば、という意図でプログラムを考えました。クラシックを箏で弾くという試み自体は新しくはないんですが、僕は普段からクラシックの奏者とコラボレーションすることが多くて、自分でも10代の頃からクラシックが好きで勉強もしてきたので、ドビュッシーの世界観を尊重しつつ、ドビュッシーと箏がなぜ合うのか、ドビュッシーの世界のなかで箏の良さをどうしたら引き出せるのか、みたいなことを考えて演奏しています。箏でこんな表現もできるんだ、というところを、ドビュッシーで感じていただけたらなと思っています。

—この曲は、ロー磨秀さんのピアノとの共演ですね。

磨秀さんはフランスに留学していたので、ドビュッシーに関してとても理

解が深いですし、その次の吉松隆さんの作品のように、複雑なハーモニーが出てくる作品でもきちんとした和声感を表現できる、素敵なお持ちの方ですね。磨秀さんのピアノにうまく箏を重ねて、ハーモニーの美しさや箏の倍音の美しさをお聴かせしたいと思います。

磨秀さんとはよく一緒に演奏しているんですけど、ピアノと箏って、それほどメジャーな編成ではないんですね。レパートリーも少ないですし。そのなかで最後の伊福部昭の《日本組曲》は、ピアノと箏の迫力が前面に出るし、お互いの良さが引き立つので、気に入っているレパートリーです。ドビュッシーまではスタンダードな十三絃の箏を使いますが、この《日本組曲》は二十五絃の箏で演奏します。

—二十五絃もお持ちくださるんですね!

楽器の違いも楽しんでいただけたらと思っています! 箏は何種類もあって、別の楽器を弾いているくらい、それぞれで弾き方が違うんです。同じ弾き方をしても良い音にならなかったりする。だから大変で、どうしてこんなにいろいろ弾かなきゃいけないの?なんて思ったりもしますね(笑)。

十三絃の箏は基本的に五音音階をもとに調絃するので、倍音や楽器の共鳴が際立ちますけど、二十五絃はもっとリッチな響きや余韻が楽しめる楽器ですね。じつは10代のころは、二十五絃の音が十三絃とは違うので、二十五絃に抵抗感があったんですけど、弾いていくうちにどんどんこの楽器の魅力が分かるようになりました。二十五絃は、野坂操壽先生(1938~2019)が考案されて、まだ誕生から30年ちょっとの若い楽器ではあるんですけ

ど、これからの箏の発展には絶対欠かせない存在になると思います。

—箏は種類によってそれぞれ別の楽器というくらい違うというお話がありました。いろいろな箏をお弾きになって感じていらっしゃる「箏らしさ」「日本らしさ」とは、どんなところにあるとお考えでしょうか。

う〜ん、それはずっと考えていることですが、まだ全然答えは出ていません。永遠の疑問なのかもしれないですね。

思い出すのは、僕の師匠の沢井一恵先生がコンサートで「北京原人は木に張られた絃を爪弾いたとき、何を考えたのだろう」というような文章を朗読されたことがあったんです。小学生のころの僕は、急に北京原人とか言われても…(笑)、全然理解できなかつたんですけど、でもそんなふうに、箏の祖先にまでさかのぼって、「箏って何?」と考えたら、原始時代にまでつながってくる。たとえば何かを叩くところから打楽器が生まれたのと同じように、絃を爪弾くというすごく原始的な動作に、どんな思いが込められていたんだろうと想像してみることが、箏の本質を見つけるためには必要なことなんじゃないかな。

それから全然新しい話になりますけれど、二十絃や二十五絃の箏を作った野坂操壽先生が、最初に絃の数を増やした箏を作ろうとしたとき、十三絃という何百年も変わってこなかった楽器の形を大幅にいじるのは邪道ではないか、絃を増やしたら、それは箏ではなくてハープになってしまうのではないか、という恐れがあったそうなんです。でも活動を続けていくなかで、「爪弾く」、つまり爪を付けて絃をはじくものはすべて「箏」なんだと、ご自分のなかで結論がついたそう

なんです。たぶんそれは、沢井一恵先生が語っていらっしゃった、歴史をさかのぼって想像する話ともつながっていると思うんですよ。

—大昔の人が木に絃を張って爪弾いて楽しんだのが箏の始まりで、爪弾いて音が鳴ったときの楽しさや美しさを、箏の先人たちはさらに追求してきたのでしょ、日本でのその成果が日本の箏の伝統になっているのよね。

そうですね。どんどん新しいことに挑戦していけるのも、そういう尊敬する方々の言葉があるからだと思っています。箏は爪弾く楽器。爪弾いている楽器は箏なんだと考えて、この楽器で何ができるだろう、今まで全くできなかったことをしてみよう、というのが、自分が今、新しい音楽をやる原動力なのかなっていうふうに思います。一番昔を見てしまえば、逆にすごく新しいことをやるのも怖くなくなる。そんなふうに自分に言い聞かせてやっていますね。

3月14日のコンサートでは、伝統的な十三絃と新しい二十五絃との響きの違いや、箏のさまざまな表現を楽しんでいただけたらと思っています。

2022年11月25日 zoomにて
協力:日本コロムビア

■公演情報

ちょっとお昼にクラシック LEO(箏)

2023.3.14(火) 13:30
全席指定 一般¥1,500
(カップオン サザンスペシャルブレンド1枚付き)
ピアノ:ロー磨秀

●曲目

沢井忠夫:鳥のように
吉沢検校:千鳥の曲
ドビュッシー:《前奏曲集》第1巻より
《ヴェール(帆)》
吉松隆:《ブレイアデス舞曲集》より★ピアノ独奏
伊福部昭:《日本組曲》より《盆踊り》(侯武多)

INFORMATION

※以下は12月24日現在の情報です。

公演等に関する最新情報は当館Webサイトにてご確認ください。

チケット・インフォメーション

《2.25(土)発売分》

■水戸室内管弦楽団 第111回定期演奏会

5.13(土) 19:00、14(日) 15:00

■ヒラリー・ハーン ヴァイオリン・リサイタル

6.6(火) 19:00

■テリー・ライリー(キーボード、ヴォーカル)88thバースデー・コンサート

6.24(土) 時間未定

2・3月の主な音楽イベント

コンサートホールATM

◆小菅 優「ソナタ・プロジェクト」Vol.1 開花

2.26(日) 15:00

料金【全席指定】一般¥4,000/U-25(25歳以下)¥1,500

◆井上修 ピアノ・リサイタル

3.5(日) 14:00

料金【全席自由】一般¥3,000/U-25(25歳以下)¥1,500

◆準・メルクル 弦楽器貸与プロジェクト発表会

3.12(日) 14:00 入場無料/要事前予約

◆ちょっとお昼にクラシック LEO(箏)

3.14(火) 13:30

料金【全席自由】¥1,500

◆第57回 あひる会合唱団定期演奏会 70周年記念演奏会

3.19(日) 14:00

料金【全席指定】一般¥1,500/高校生以下¥700

◆パトリツィア・コパチンスカヤ ヴァイオリン・リサイタル

3.21(火・祝) 15:00

料金【全席指定】一般¥6,000/U-25(25歳以下)¥2,000

エントランスホール

◆オルガン・レクチャーコンサート Vol.6

フランス・オルガン交響楽派から現代へ

2.23(木・祝) 19:00

料金【全席指定】A席¥3,000/B席¥2,500/U-25(25歳以下)¥1,000

◆パイプオルガン・プロムナード・コンサート(入場無料/要事前予約)

□2.4(土) 12:00~12:30/13:30~14:00 森永ナディア真莉子

□2.12(日) 13:00~13:30 栗山美緒

□3.4(土) 12:00~12:30/13:30~14:00 安井 歩

◆プロムナード・コンサートEXTRA(入場無料/要事前予約)

2.25(土) 13:00~13:45 下山明莉(オーボエ)

予定枚数終了

◆「市民のためのオルガン講座」発表会(入場無料/要事前予約)

3.18(土) 13:30~

2023年1月10日発行(第254号)

編集:水戸芸術館音楽部門 | 中村晃、関根哲也、高巢真樹、篠田大基、鴻巣俊博、高木春佳

発行:(公財)水戸市芸術振興財団 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8118(音楽部門)

Tel.029-231-8000(チケット予約センター 9:30~18:00・月曜休館) <https://www.arttowermito.or.jp/>

デザイン:K5 ART DESIGN OFFICE. 印刷製本:山三印刷株式会社

■編集後記

オルガニストの梅干野安未さんには世界最高峰・バリ音楽院オルガン科での経験を気さくにお話しいただき、飾らない人柄がとても素敵でした。2/23「オルガン・レクチャーコンサート」での演奏とお話しもご期待!(鴻)

年度は4月で替わるのに、私のスケジュール帳は1月始まりなので、毎年秋頃になると年明けの予定をメモするのに不便を感じます。でも、年度最後の3か月を新しい手帳で過ごせるのは、リフレッシュした気分が良いですね。(篠)

今更ながらKindle端末を購入。今年は電子書籍の本棚の充実を。入手しづらかった本が簡単に手に入ることもあるので嬉しい。逆に、読みたい本に限って電子化されていないことも。ただ、何と言っても持ち運びが楽なので気に入っています。(て)

Lucky FM 茨城放送「水戸芸術館 presents みんなのクラシック」

毎週日曜 7:30~8:00

パーソナリティ:石井哲也アナウンサー

出演:音楽部門芸員(月替わり)

芸員がおススメの曲をご紹介します、クラシックの魅力をお届けする番組です。

▼Lucky FM ウェブサイト <https://lucky-ibaraki.com/>

▼radiko(ラジオ)でもお聴きいただけます <https://radiko.jp/>



好評
放送中!

演劇・美術のイチオシ企画!

ACM劇場

◆演劇手法を用いた《声》と《コミュニケーション》の体験型ワークショップ「伝わる声のつくり方・基礎編」新聞コラムを使って朗読トレーニング!

2.2(木)、3(金) 13:30~15:30

2.4(土) 10:00~12:00/13:30~15:30

【参加費】¥2,000

【対象】小学校5年生以上で、
声を磨いてみたい方など誰でも

※内容や持ち物など、
詳しくはHP(ACM劇場)をご覧ください。



現代美術ギャラリー

◆ケアリング/マザーフッド:

「母」から「他者」のケアを考える現代美術

2.18(土)~5.7(日)

【休館日】月曜日(祝日の場合は翌火曜日)

【開場時間】10:00~18:00

(入場は17:30まで)

【入場料】一般¥900/団体(20名以上)

¥700 ※高校生以下/70歳以上、障害者手帳

などをお持ちの方と付き添いの方1名は無料



本間メイ(Bodies in Overlooked Pain
(見過ごされた痛みにある体))2020年

『水戸芸術館パイプオルガン活動記録集 1990~2021 つくる、かなでる、ひろがる』

当館のパイプオルガンにまつわる31年分の活動をまとめた記録集を刊行しました。当館メンバーズでご希望の方にはエントランスホール・チケットカウンターでお1人様につき1冊、お渡ししています。またWebサイトでもPDFでご覧いただけます。



美食の街バリのビストロでは、
鴨のコンフィと赤ワインの
組み合わせが最高!



最近、16時間ファスティングが気になっています。16時間断食することで、老廃物や毒素を排泄する働きが強まり、腸内環境が整うらしい。夜ご飯を早めに食べ、16時間後に昼食を食べると言うやり方が簡単みたいです。やってみます!(春)

オルガン講座では初心者の方から本格的にオルガニストを志す若者まで、幅広い受講生が発表会に向けて練習中です。読者の皆さんも、来年度はオルガンデビューしてみませんか? 建物全体を満たす壮大な響き、ぜひ一度体験を。(樹)

「MCO子どものための音楽会」がコロナ禍で今年度も開催できなかった。かわりに一昨年度に続いて、島田真千子さん(vn)と小林万里子さん(pf)が、11日間に22小学校を訪問し、演奏を届けてくれた。子どもたちの心に音楽の種が蒔かれたことを願う。(中)